2017年5月号

LINEと共同開発
子どもをSNSトラブルから守る教材

SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）を利用する機会が多くなった現代社会。特に小・中・高校生は友人関係のトラブルや犯罪に巻き込まれるケースも報告されている。SNSによるトラブルの事例を伝える注意喚起だけでは回避できない解決法を、静岡大学とLINEが共同で開発した。

◆ 研究の概要

現在、小学6年生の41.7%、中学2年生の62.2%、高校2年生の94.9%が無料通信アプリLINE（ライン）を「いつも使う」「時々使う」と回答しており*1、こうしたSNSを介したコミュニケーショントラブルへの対応と指導が学校教育において喫緊の課題となっている。

学校では情報モラル教育の充実を図っているが、従来の指導方法では、その危険性を頭では理解できているにもかかわらず「自分のこと」として考えることが難しく、「自分とは関係ない」「自分は大丈夫」と感じる場合が多く見られた。

そこで本研究では、「教えること」をデザインする教育工学の知見を生かし、LINE株式会社と共同で情報モラルを「自分のこと」として考えさせる教材を開発した。

◆「トラブル事例を伝える」指導の問題点

これまでの学校での情報モラル教育というと、通信事業者や専門家を招いての講演会という形式が多く、その内容は「こんなトラブルがありますよ」「こんなトラブルに気を付けてくださいね」というトラブル事例の紹介と注意喚起が中心だった。しかし、こうしたトラブル事例を紹介する講演会では、「トラブルがあるのは分かるけど、そんなの自分には関係ないし」と子どもたちが感じてしまい、当事者としての自覚を持ちにくいという課題があった。

例えば、インターネットでの炎上事件を紹介し、「不適切な写真をアップしないようにしよう」と指導しても、子どもたちは「はい、不適切な写真はアップしません」と答えるだろう。ここでの問題は、「不適切な写真」とは何かが指導者と子どもたちの間でずれていることにある。同様に「スマホに依存する人が増えているから、夜遅くまで使い過ぎないようにしよう」「ネットでのいじめが増えているから、SNSで悪口を言ったり、嫌なことをしないようにしよう」と指導しても、「夜遅く」「使い過ぎ」「悪口」「嫌なこと」などは曖昧な言葉であり、大人と子ども、または子ども同士でも認識に“ずれ”が起きやすくなる。自分は夜遅くないつもりでも相手は夜遅いと思ってしまう、自分は悪口とは思っていなくても相手は悪口と思ってしまうという“ずれ”を考えさせ、そこを議論する必要がある。

◆ どうすれば「自分のこと」として考えられるか

筆者の研究室では、2014年度からLINEと共同研究を行い、「トラブル事例を伝える」という情報モラル教育ではなく、子どもたちに「もしかしたら、私もトラブルを起こしちゃうかも…」という「当事者としての自覚」を促すことを目的とした教材の開発を行った。教材では、指導の曖昧さを扱い、「嫌なことってなんだろう」、「不適切な写真ってなんだろう」ということを、カード型の教材（写真1）を使って他者と比較しながら考えさせる。

例えば、「自分とみんなの嫌なこと」というワークでは、①すぐに返信がない、②なかなか会話が終わらない、③知らないところで自分の話題が出ている、④話をしているときにケータイ・スマホをさわっている、⑤自分が一緒に写っている写真を公開される、という五つを嫌な順に並べ替えて、グループで共有し議論する。実際の授業では、「私は『自分が一緒に写っている写真を公開される』ことは全然平気だったけど、一番嫌だって思う人もいるんだ！　もしかしたら、いままでやっちゃってたかも…」という声を聞くことができる。

こうした指導方法を「カード分類比較法」と呼び、自分と他者との感じ方の“ずれ”を、カード教材を通して考えさせ議論させることにより、子どもたちにトラブルを自分のこととして自覚させることができると考えている。「不適切な写真とは何か」「使い過ぎとはどのような状態か」を、カード分類比較法を用いて他者と比較・議論することにより、自分も不適切な写真を公開していないか、自分も使い過ぎていないかという自覚を促すことが期待できる。

◆「こんなはずじゃなかった」をどう防ぐか

さらに2016年度は、こうした教材を発展させ、「こんなはずじゃなかった」をどう防ぐかという教材を開発した。

子どもたちによくあるトラブルの原因として、リスクの見積もりの甘さが挙げられる。例えば、「ちょっと写真をアップしても、まさか炎上はしないだろう」「少しぐらいネットでからかっても、まさか怒らないだろう」というように、リスクの見積もりが甘く「どのくらい危険か」がずれやすいために、「こんなはずじゃ…」というトラブルが起きてしまう。

そこで「当事者としての自覚」の次のステップとして、自らリスクを予想し、それらを回避する力を育てる「リスクの見積もり」をテーマとした教材を開発した（写真2）。

安全工学の分野で研究されるKYT（危険予知／危機予測トレーニング）の手法を取り入れ、子どもたちがインターネット上のコミュニケーションに起因するリスクを予想し、それがどの程度危険なのかというリスクを見積もるワークを行うことで、自らリスクを予想しそれらを回避する力を育てることができる。

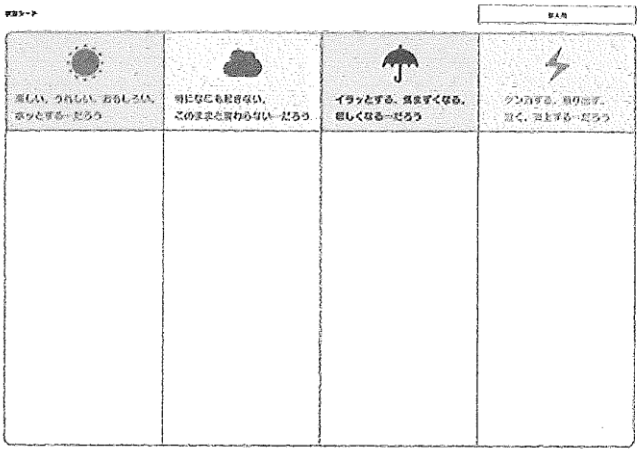

写真2　グループトークでのリスクを見積もるカード教材

◆「トラブル事例の紹介」から「考え議論する」へ

インターネット上のコミュニケーションのトラブルでは、「こうすればすぐに解決できる」といった指導は難しい。「トラブル事例の紹介」「危険性の啓発」という安易な指導法ではなく、どうしたら子どもたちに問題を自分のこととして自覚させるかという視点で、「考え、議論する情報モラル」の指導法を今後も研究していきたい。

なお、ここで紹介した教材は、LINEホームページよりダウンロードすることができる*2。

●参考文献

酒井郷平，塩田真吾，江口清貴．トラブルにつながる行動の自覚を促す情報モラル授業の開発と評価—中学生のネットワークにおけるコミュニケーションに着目して—．日本教育工学会論文誌．2015, vol. 39, no. Suppl. p. 89-92.